



「先生は、休憩されなくて大丈夫なのですか？」

マリナが心配そうに言う。

「ああ、まだ大丈夫だ。もう少し様子を見てから、ちよつと仮眠させてもらうよ」

「あまり無理をなさらないでくださいね。まだ先は長いんですから」

「ありがとうございます」

「この先のシフトについて計画を立てた方が良さそうですね。それぞれの役割と作業量から負荷が平均化されるようにしないといけませんし」

「そうだな。予定の作業はだいたいまとめてあるから、それを元に案を作ってもらえると助かる」

「わかりました。やってみます」

「役割的には、パイロット2名は互いに補完できるから問題ないとして、エンジニアリングは私がサポートできる。ナビゲーションと通信は沢村、エドワーズでカバーできるだろうな。あとはメデイカルだが・・・」

「バイタルのモニタリングは私がサポートできますよ」

「そうか、ユイがいたな。クレア君が休憩中はユイにメデイカルをたのむとしよう。それと、各パートのバックアップもたのむ」

「了解しました。お任せください」

フランクは腕組みをして、教官席のシートに、もたれかかると、ちよつと目を閉じた。流石に疲れたのだろう。無理もない。クルーが学生ばかりのミッションでは、その責任は重大である。おそらくは、休憩をとっても気は休まらないだろう。

「コース正常、航路上、1光時以内に障害なし。ほんと、何も無いよねえ。これじゃ、パイロットも暇よね」

「あんたと一緒にしないで欲しいわ。これでもシステムのモニタリングは集中力があるのよ」

ケイと美月はあいかわらず。まあ、こんな会話でも、退屈しのぎにはなるだろう。実際、何か異常でも起きない限りは、ほとんどすることが無いのは確かだ。だからといって、異常が発生すれば大事である。出発してから、まだ1日も経過していないが、既に通常航行の巡航速度

では太陽系の惑星軌道外縁まで数日かかる距離まで飛んでいる。ここでワープ航行に支障が出たら、自分たちで出来ることは極めて限られてしまう。まして、この先、時間が過ぎれば過ぎるほど、何か起きた場合の状況は悪化するのである。もちろん、辺境とは言え、まだ太陽系の中にいるのだから、救援は比較的短時間で得られるだろうが、少なくとも今回のミッションは頓挫することになる。つまり、地球にとつての貴重な時間が失われるわけだ。

「うむ、機関も今のところ安定しているようだ。それじゃ、私もちょっと休憩させてもらおうが、何か問題が起きたら、すぐに呼んでくれ。遠慮はいらん」

「わかりました。ゆっくりされてください」

「大丈夫です。まかせてください」

「そういうあんたが一番危険なのよね」

「いやいや、それはお互い様じゃない？」

「それじゃ、たのむぞ」

フランクは、そう言うと、コックピットを出て行った。

「よし、これで女子だけになったことだし、ガールズトークの時間ってことで」

「ふん、勝手にやってなさい」

「えー、私は美月の話が一番聞きたいんだけどなあ。ケンジの話とか？」

「今更何を話せて言うのよ。見ての通りじゃない」

「つまらないなあ。そこはほら、嘘でもいいから何か盛り上がる話を・・・」

「・・・」

どうやら美月はケイを無視することにしたようである。それっきり黙り込んでしまった。

「ねえ、マリナは何かないの？面白い話」

「あ、ごめんなさい。今、先生に言われたシフトの計画を作っているんで、もうちょっと待ってくださいね」

「あー、なんだかつまらないなあ・・・」

マリナにも振られたケイは、本当につまらないさそうな顔をして、シートにもたれかかった。それからしばらくの間、会話もなく時間が流れていった。そうしている間にも、船は太陽からどんどん遠ざかっている。通常空間の速度でいえば、光速の4倍、毎秒120万Km弱のスピードは、地球からL2の距離を1秒ちよつとで飛んでしまう速さだ。だが、太陽系を飛び出す

宇宙船の速度としては、まだまだハエが止まりそうなレベルである。この速度をもってしても、隣の恒星まで1年かかる。なるべく早く速度を上げないといけないのだが、この船の機関はプロトタイプであり、まだ十分なテストもできていない。慎重を期す必要があるのはわかるが、ちよつとストレスがたまる。おそらく役割的には、いや性格的にも、パイロットの美月が一番ストレスをためているはずだ。だが、それで美月が何かをしでかす可能性は低い。時々無茶なこととする美月だが、少なくとも無謀なこととはしていない。それに、全員のストレスレベルはマリナが常にモニターしているから、異常があれば対処してくれるはずだ。

「シフトの案で、ちよつと相談があるのですが・・・」

マリナはそう言うと、仮想パネルをひとつ開いて、そこにシフト案を映し出した。

「相談って？」

暇そうにしていたケイが真つ先に反応する。

「実は、各シフトにナビゲーション、C&Iの役割ができるメンバーを割り振ろうとすると、この中から一名、男子側のチームに入ってもらわなければならないんです。ケイとサムのどちらか、ということになるのですが・・・」

「あ、それなら私が・・・」

「待ちなさいよ。あんた、どうせ何かたくらんでるでしょ」

ケイを遮って美月が話に割り込む。

「別に、何もたくらんでないけど。まあ、ケンジと一緒にチームもいいかなと思っただけだね」

「その事を言ってるのよ。どうせまたケンジにちよつかいを出そうって魂胆なんじゃないの？」

「美月ってば、考えすぎだって。どうやってもパイロットの美月は、こっちにいないといけないし、マリナも動けない。そこは私が皆を代表して、向こう側に行くってのが、一番よくない。」

「いったい何を代表するつもりよ」

「え？もちろん女子代表。もろもろ代表して・・・ってことで。あ、そうだ。ジョージとトレッドってことでしょうか？あいつなら役に立つでしょ」

「まあ、あんたと比べりゃ、天地の違いくらい役に立つわね。ついでに、そうやってフランク先生も自分の側に持ってこようって魂胆も見え見えだわ」

「バレた？ケイさんの逆ハーレム作戦」

「好きなことを言つてなさい。まあ、あんたが別チームになれば静かでもいいわね」

「じゃ、私があつちつてことで問題なしだね」

「言つとくけど、人の下僕に手をだすんじゃないわよ。まあ、あいつも、それほどバカじゃないだろうけど、仕事の邪魔したら承知しないから、覚えておきなさい」

「それでは、ケイが男子チーム側のナビ兼C&I役をしてもらおうという事で、いいですか？」

「しようがないわね。いいわよ」

「問題ない」

「それでは、ケイをお願いしますね。それで、このあとのシフトから移動してもらうので、ケイには、これから休憩に入ってもらいます。ちよつと休憩時間が短くなりますが、いいですか？」

「問題ないわ。ここまでほとんど寝てみたいだし」

「あのねえ……。ま、いいけど。とりあえず4時間くらいは寝られるよね。それで十分だよ」

なんともはや危なっかしい会話の末、どうやらケイは俺たちの側に決まったようである。

「それで、エンジニアリングは、やはりジョージ君にこちらに移ってもらう方がいいでしょうか？」

「そうね。でも、あいつ、なにやら工作してるんじゃないの？」

「そうなんですよ。この後のミッションで重要なものようなので、それは続けてもらいたのですが、とりあえず、スピードを上げるとか、節目のところは見てもらおうとして、あとの部分はユイにバックアップをお願いできればと思います」

「問題ありません。機関のモニタリングは常時行っていますから、何かあればすぐにジョージさんに連絡して判断を仰げます」

「わかりました。では、よろしくお願いしますね。あと、男子チームのメデイカルモニタリングもお願いします。何か異常があれば、すぐに私に連絡してください」

「了解しました。お任せください」

「それでは、これから、このシフトで12時間交代でいきましょう。ただ、交代の時間帯はそれぞれ1時間オーバーラップする形にしたいので、実際は13時間、コックピットにいることとなります。ちよつときついですが、数日のことなので我慢してくださいね」

「それでも11時間は休養ができるなら十分だと思う」

「問題ないわ。男子には・・・聞くまでも無いわね」

「ありがとうございます。先生には、あとで私が伝えて了承をとっておきますね」

「それじゃ、私は休憩するね。後はよろしくつ。どうする、ジョージを起こす？」

「あ、ジョージ君は次のシフトから入ってもらいます」

「マリナってば、優しいねえ。それじゃ、お先っ」

「あんた、寝坊なんかしたら承知しないからね」

ケイは軽く右手を振りながらコックピットを出て行った。なにやら、俺たちが寝ている間に、シフト割りが全部決まってしまったようだ。意見を言う機会を与えられないのはちよつと不満ではあるが、マリナが決めたシフトに異議はない。強いて言うならマリナも、こちら側に来てくれると嬉しかったのだが、そうしなかったのは彼女なりの遠慮だったのかもしれない。



それから数時間が何事も無く過ぎていった。交代時間となって、また全員がコックピットに勢揃いする。

「・・・このような形でシフトを組んでみたのですが、いかがでしょう」

「問題ないんじゃないか？」

「そうだね。じゃ、僕はこのまま次のシフトまで続行かな」

「あ、ジョージ君は適当な時間で先に休憩に入ってもらい、次のシフトの頭からお願いしませぬ。ちよつと休憩が短くなってしまうますが・・・」

「それじゃ、僕はそれまでの間、また作業を続けるよ」

マリナが、シフトの組み合わせを説明して、全員がそれを了承する。まあ、文句を言う奴がいるとしたら、美月くらいだろうが、今回は事前にすりあわせ済みだ。

「よし、それじゃ、全員揃ったタイミングで、また速度を上げるぞ。各自持ち場についてチェックを始めてくれ」

フランクの一言で、全員が持ち場に着き、いつものように順次システムチェックを実行する。

「全システム異常ありません。準備完了です」

「よし、それじゃ、速度を上げるぞ。中井、レベル3まで上げる。ゆっくりいな」

「了解。レベル3まで増速します。2. 1、2. 2、2. 3、2. 4・・・」

「機関異常なし。出力28%から上昇中」

「2. 7、2. 8、2. 9・・・。現在ワープレベル3」

「機関異常なし。出力32%で安定」

「現在のワープ深度で、1光時以内に障害物は検知できません」

「ワープドライブの調整偏差は計測限界以下で問題ありません。引き続きモニタリングを継続します」

ユイもすっかりクルーの一員のようなようだ。自分の持ち場をみつけて楽しんでいるようにも見える。船は現在、通常空間の尺度では光速の8倍で飛んでいる。

「よし、それじゃ、このままレベル4まで持つて行けど。中井、やってくれ」

「了解。レベル4まで増速します。3. 1、3. 2・・・」

「機関出力35%で上昇中。出力レベルがちょっと変動していますが、許容範囲内」

「3. 7・・・3. 9・・・。現在ワープレベル4」

「機関出力38%。ちょっと変動が大きくなっています。まだ許容範囲内ですが」

「ユイ、変動の原因はわかるか？」

フランクが尋ねる。

「スタビライザーの過剰制御のようです。この深度の空間には小さな乱れが認められます。

それに適応するための制御が原因と考えられます。フィードバックのパラメータを調整すれば解消できると思います」

「この領域で空間に乱れは珍しいな。調整できるか？」

「可能です。所要時間は2分18秒」

「よし、やってくれ」

「了解しました。調整を開始します」

現在の速度は、実空間の尺度では既に光速の16倍まで上がっている。隣の恒星まで3ヶ月ほどでいける速度だ。それでも、まだまだ遅い。最終的には、さらにこの16倍、つまり光速の256倍の速度まで加速しないといけないのである。ワープレベルが一段階上がるごとに速度は2倍になる。つまり、あと4段階、レベル8が最終目標だ。ちなみに、この宇宙艇の設計乗の最高速度はレベル12、つまり、さらにまた16倍の速度、つまり光速の4096倍である。この速度だと、隣の恒星まで約8時間で飛ぶことができる。もちろん、今回はそんな速度

を出す予定はない。なにせ、この機体のワーユニツトは、まだプロトタイプなのである。異常動作で宇宙の迷子にはなりたくない。

「調整完了しました」

「出力安定。変動は検出限界以下です」

「よし、この調子であと2段階くらい上げたいところだが、反応炉の状態はどうだ、エイブラムス」

「はい。出力は38%で安定。レベル6で、おそらく50%未満でしょうから、まだ十分に余裕がありそうですね」

「ユイ、君の意見はどうだ」

「ここまでの出力曲線とフィードバック曲線の状態から推定して、レベル6時の出力は48%プラスマイナス0.2%、変動値は、空間の乱れが今の状態と同じと仮定して、最悪のケースでも検出限界ぎりぎりですから問題はないでしょう」

「ふむ、あとは深部の空間が安定しているかどうかだが、こればかりは潜ってみないと断言とも言えないからな。一段階ずつ慎重にいくしかないな」

フランクは、そう言うのと腕組みをして少し思案する様子を見せる。

「よし、もう一段階上げるぞ。中井、準備はいいか？」

「はい、準備できています」

「それでは、レベル5に上げよう」

「ワープレベル5に増速します。4.1、4.2……」

「機関出力40%から増加中」

「4.7、4.8、4.9、現在レベル5」

「機関出力43%で安定。変動は検出限界以下です」

「問題なさそうだな。よし、もう一段いくぞ。中井、レベル6に上げる」

「了解、レベル6に増速。5.1、5.2……」

「機関出力45%から上昇中。また少し変動が出ていますが許容範囲内です」

「空間の乱れが大きくなっていますが、機関の自律系が変動に対応していますから、問題はありません」

「よし、続行だ」

「5.7、5.8、5.9、現在レベル6です」

「機関出力48%、変動は許容範囲内。まだ余裕あります」

「よし、これで少し様子を見よう」

フランクがそう言った直後、大きなアラーム音が鳴り響いて、機体が大きく揺れた。